令和８年１１月９日　*vol.31*

# 「言葉を遺すということ」

県立神戸高等学校長
新谷　浩一



## ○　さつますぎが教えてくれる

新たな花が部屋を訪れました。一見、ミニトマトを思わせるのは赤ナスだそうです。**『赤ナス、さつますぎ、バカラの３種を生けました。秋も深まり、肌寒く感じる日が増えてきました。が、さつますぎは力強く葉を茂らせています。そんなさつますぎの花言葉は「堅固、堅実、雄大」だそうです。様々なことがあり、大変な日々ですが、さつますぎを見習って過ごしていきたいです』**とのメッセージが添えられています。

さつますぎ、頼もしいですよね。寒さに負けることなく青々と茂る様が実に見事です。



さて、私は参加が叶わなかった兵庫高校との定期戦。皆さんの活躍を「記憶に遺せない」残念さはもちろん、同時に気に懸かったのは「記録にも遺せない」残念さでした。そんな私の思いを汲んでくれたのが吉岡教頭先生。「そのことが気になっていたので、良かったら通信を書きましょうか」そう提案してくれたのです。そこですべてを託したのが先週の通信です。**皆さんの頑張りで多くのトロフィーが校長室前に飾られました。ありがとうございます。**

また、青森県で開催された『青の煌めきあおもり国スポ 第80回国民スポーツ大会』にバスケットボールの兵庫県代表として選抜された尾関さんは全国第５位の賞状を引っ提げて帰って来てくれました。「でも、私の出場時間は全試合の３分の１ほどなんですけど…」と尾関さんは照れて報告してくれましたが、チームには十分貢献したと胸を張れますよね。お疲れさまでした。



女子バスケ部自体も定期戦では見事な勝利。私は去年の冬のことを思い出します。底冷えのする夕暮れの体育館。79回生と80回生の女子バスケ部員は端っこの方で、何処か遠慮しがちにボールを追っていました。部員数も１チーム分に満たないため、大会には３校合同で出場していました。それでも、投げ出さずに練習を積み重ねた成果ですね。多くの１年生部員が入部した勢いでこの秋の県新人戦ではベスト16入り。顧問の山根先生が話してくれます。「その上も見えてきました」と。

そう言えば、私が定期戦に参加できないことを心から残念がってくれた男子硬式テニス部は、定期戦において７対０の完勝を収めたとのこと。その輝き、見たかったですね。それでも、こんなふうに思い入れをもって皆さんの活躍を喜べるのは、さつますぎの花言葉どおりの「堅実さ」を貫き通した皆さんの日々を、私でさえも知っているからです。**御存知の通り、勝敗は紙一重です。でも大切なことはその過程で何を考えたか、そして導き出された結果をどのように捉え、次のここ一番に繋げていくか、ということに他なりません。**

合唱コンクールであと一歩及ばず、音楽会出場を果たせなかったクラスの学級通信を見せてもらいました。**「努力が必ず報われるということではないということを学んだ。一方、その努力や頑張りが報われなかったからといって、してきたことが無駄だったり、意味がなかったりするわけではないということも学んだ」**
**「自分たちが納得いかない結果になって悔しいと思えていること自体が、頑張った証拠であり、結局、過程が一番大事だと私は思っているので、かなり満足のいく行事になった」**　これらの感想に教えがありますね。

スニーカーの底が完全に外れてしまいました。ほぼ９年に渡った私の両親に対する遠距離介護を支えてくれた同志。ちょうど母の３回忌直前のことで、「お疲れ様。よく一緒に頑張ったよな」そう言ってもらった気がした私は、写真に収めてから「さようなら」を告げました。両親を介護した過程に私は悔いが全くないのです。６月１日の通信で父についての通信を添えさせてもらいました。今回は母の番にしますね。



**通信として言葉を遺せたからこそ思い続けられることが私にはあります。私に書き続けさせてくれた皆さんへの感謝とともに思います。「きみも思いを言葉にして遺しておいたら」ってね。**

令和５年５月１５日　*vol. 11*

# 「病めるときも　健やかなるときも
# 彼女が愛してくれたから
# 僕は自分自身のことを少しだけ好きになれたのです」

高校教育課長
新谷　浩一

## ○　教員の頃、僕はこんなことを学級通信に書いていました

**『母から電話があった。花を贈ったので、そのお礼の電話だった。「もう、いいのに」って母は言うけれど、おかあちゃんは一生おかあちゃんだもんね。「もういい」わけない。**

**離れて暮らすようになって、もう 16 年になる。まもなく一緒に暮らした歳月を、離れて暮らした歳月が越えていくのだろう。僕の人格形成に少なからぬ影響を与えた母。年間に休みが 10 日ほどしかとれない、こんな働き方をしているので、会えるのは正月くらい。それは淋しいことのような気もするけれど、「つまらない、つまらないって言いながら、働いているよりはいい」と母は言う。確かにその通りなのだろう。**

**まだ上手に母のことは語れない。うまい感謝の言葉も見つからない。いつまでも忘れられないのは中学生の頃のこと。よく問題を起こしては学校に母と呼び出されたっけ。自転車に乗れない母を後ろの荷台にのっけて、学校までペダルを漕いだ。母はそういう時きまって、何も言わなかった。じっと黙ったままだった。あれがいちばん辛かったね。あれがいちばん辛かった。償うこともできないまま、時は過ぎゆく』**

## ○　昨日は母の日でしたね

指導主事となる前年の母の日に書いた学級通信。親孝行なんて何ひとつ出来ていない自分を戒めるような文章です。結局、ともに暮らしたのは 19 年。20 歳になる年に離れて暮らすようになり、それからは毎年カーネーションを送っていました。でも、もう７年ほど前に花の世話どころか自分自身の世話さえできなくなったので、送るのを止めました。それでも当時は父が元気なこともあり、１年間は老老介護をしてくれていました。

父はおかずこそスーパーの惣菜を買っていたものの、米を炊き、味噌汁をつくり、食器も洗ってくれていました。洗濯機を回し、拭き掃除をし、母の下の世話もしてくれていました。だから月に何度か帰省する僕が母にできることと言えば、おかずのストックをつくり、冷蔵庫や冷凍庫に並べることや風呂につからせてあげることでした。かつて母がつくってくれたように麻婆豆腐の豆腐を絹ごしにするととても喜んでくれました。

しかし、母の認知症の進行は早かったですね。あっという間に、その世話は父の手には負えなくなりました。そこで施設を回り、父が自転車で会いに行けるよう家から近い施設を選び、預かっていただくことになりました。やがて父も認知症になります。数年前まで父の日には好物の魚の干物を送っていたのですが、自分で魚を焼くことも出来なくなってしまったので、それも止めました。僕は父の日も母の日も失ったのです。

ふと思います。早くにご両親を亡くされた方は切ない父の日と母の日を過ごしてこられたのでしょうね。幸か不幸か、この歳になってようやく親孝行のようなことができた気がする僕も、遠かれ早かれ両親そのものと別れる日が来るのでしょう。年齢を重ねるということはこうして１つ１つ失っていくことなのですね。

児童虐待や育児放棄のニュースに触れる度に胸が締め付けられるのは、その１つ１つの事例に何も関与できない自身の無力さを思い知らされるとともに、欠点だらけの不肖の息子にただ寄り添ってくれた母のかつての姿を思い出すからですかね。

生まれ落ちる環境を人は選べません。だからこそ今いる場所で必死に伸びようとする生徒が大切にされる学校づくりを精いっぱい手伝いたいな、改めてそう思う母の日です。



令和６年１１月５日　*vol.30*

# 「百周年記念式典のあとの話」

県立加古川東高等学校長
新谷　浩一

## ○　１０月２６日、その日は以前から…

「加古川東高校の百周年はとても重たいけれど、あんたなら何とかするやろ。頼みますよ」。藤原教育長にそう告げられた３月から、ずっとこの日のことを気にかけていました。何度も失敗する夢を見ました。壇上の隣の席で教育長はしかめっ面をしています。そんな夢です。だから 27 日を心の支えにしていました。川本先生が箏曲部のステージのチケットをわけてくれたのです。無事に式典をやり遂げ、翌日は心穏やかに琴の音に耳を澄ます、そんな自分を想像していました。しかし、現実は甘くありません。

９月に入ると、認知症で施設にお世話になっている母の体調が一気に悪化し、半ばには医師から「もったとして、ひと月」と伝えられました。急ぎ埼玉県にある母の施設に向かいました。食事が摂れなくなっているようで栄養剤を点滴で補給するようになっていました。ご飯をつくるのも、ご飯を食べるのも大好きな母ですが、両方できなくなってしまったのです。それはあまりに辛い現実でした。

その後、何度か母を訪ねるために夜行バスで往復しました。母はやがて声も発せなくなってしまいました。それでも僕の顔を見ると足を動かして僕を蹴ろうとします。何か伝えたいことがあるのでしょう。何度も何度も蹴られましたが、母が私に何を伝えたいのかは解らず仕舞いでした。

10 月 23 日、「今週末まではもたないかもしれない」そう医師から告げられました。さすがに私も人の子なので気持ちはぐらぐらと揺れ動きました。埼玉に飛んでいき、母に会いたい気持ちがありました。でも、26 日は 200 人近い来賓の方を迎える大切な式典の日です。そこに穴を空けることは校長としては許されません。だから毎朝、祈るようになりました。あと４日、あと３日、あと２日、あと１日…。

26 日の朝も祈りました。「式典と祝賀会が終わったら、すぐに新幹線に乗るので、もうちょっとだけお願いします」と。果たして母は頑張ってくれました。ようやく施設に着いたのは 22 時を回ってからでしたが、目こそ閉じていたものの母は呼吸をしていました。高校生になる私の娘が一緒でした。彼女は修学旅行から帰宅した翌日でしたが「ババに会えるなら会いたい」と言って一緒に来てくれたのです。

母の頬に触れて「ありがとう」と私は伝えました。母は一瞬まぶたを開きましたが、すぐに閉じてしまいました。足を動かしてもくれませんでした。施設の方のご厚意で私と娘はそのまま母の近くで横になりました。明け方、再び母の頬に触れました。まだぬくもりはあります。少し安堵した私と娘は５月に息を引き取った父のお墓にお花をあげに行きました。「もう少しでも…」と父にお願いしました。



翌日の朝は保護者の方から、お話を聴く約束がありました。そのため日曜の遅い時間に帰宅し、月曜は朝から学校に。１時間ほどお話を聴きし、笑顔で学校を出られる保護者の方を見送った直後、電話が鳴ります。母が息を引き取ったという知らせでした。母は保護者の方との約束も守らせたかったのですね。再び私は埼玉に向かうこととなりました。

母が認知症と診断されてから、もう９年が経過します。その間、遠距離介護を続けてきましたから、いつかはこんな日が来ると頭では解っていました。それでも現実にその日が来ると、受け入れるのは難しいですね。

**「おにいちゃんは浩ちゃんの埼玉出張を待っていたし、多加子さんは浩ちゃんの仕事の目処がつくのを待っていたんだもんな」。父の弟にあたる叔父から告別式の席でそう声を掛けられます。「不肖の息子なんで僕が心配で仕方がなかったんですよ」私はそう返しました。東高に赴任させていただいたこと、両親を見送ったこと。やたらと『運命』という言葉の重みを感じてしまうこの１年ではあります。**